

# 授業での大学の活動が地域社会に与える影響について

——A 市での活動を事例にして——

大 東 貢 生

## 【抄録】

この小論の目的は、大学でのアクティブ・ラーニング型の授業による地域での学生と教員の活動が地域社会に与えた影響について、A 市 B 地域における C 大学の取り組みから概観することにある。担当教員である筆者の経験とインタビューから、地域側と大学の双方の目的を共有することと地域側の組織に担当教員を何らかの形で巻き込むことによって、地域と大学とのギャップを埋め双方にとって効果的な影響があらわれるのではないかとまとめた。

キーワード：アクティブ・ラーニング、授業での学生の地域活動、地域のメリット・利点、大学・地域・行政による連携の重要性、目的の共有

## 1. 問題の所在

近年大学には社会貢献・地域貢献の重要性が求められるようになってきている。以前筆者らがまとめたところでは（大東貢生・全炳昊 2019, 大東貢生・徳井公樹 2020）、国の政策においては、2005 年の文部科学省中央教育審議会の答申「我が国の高等教育の将来像」において「国際協力、公開講座や産学官連携等を通じた、より直接的な貢献も求められるようになっており、こうした社会貢献・地域貢献の役割を、言わば大学の「第三の使命」としてとらえていくべき時代となっているものと考えられる」とされている（文部科学省 2005）。一方、2012 年の文部科学省中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」においては、学士課程教育において「学生同士が切磋琢磨し、刺激を受け合いながら知的に成長することができるよう、課題解決型の能動的学修（アクティブ・ラーニング）といった学生の思考や表現を引き出しその知性を鍛える双方向の授業を中心とした質の高いものへと転換する必要がある」（文部科学省 2012）とされている。

この大学の社会貢献・地域貢献とアクティブ・ラーニングによる大学教育の質的転換によって、以前に筆者らが指摘したように、大学の授業において地域社会の中で学生がアクティブ・ラーニングを行うことで、同時に大学の社会貢献や地域貢献を果たすということが予想される（大東・全 2019:94）。こうした授業を通じた活動が大学にメリット・利点を与える一方、受け入れる、あるいは協働する地域社会側にはどのような影響あろうか。以下では、先行研究による地

域社会のメリット・利点を踏まえつつ、研究の対象である A 市 B 地域での C 大学による活動をまとめ、地域と大学の連携について考察を行いたい。なお、この活動において筆者は C 大学のアクティブ・ラーニング科目の担当教員であり、本論では担当教員である筆者の観察による記述となり主観的内容が含まれることを断っておきたい。

## 2. 先行研究の整理

大学での授業による地域社会側への影響について、筆者らはこれまで以下のまとめを行っている。先行研究によれば、水野 晶夫 (2013)、蜂屋大八 (2014)、山本早苗 (2015)、遊佐順和 (2015)、谷村要 (2017)、中村保ノ佳 (2017)、早川公 (2017 a, 2017 b)、白石克孝・櫻井あかね・中村保ノ佳 2018, 2019) の分析から、地域社会側のメリット・利点を「学生の頑張りに地域の人々が奮起される」「地域資源が再認識される」「さまざまな人々との交流が生まれる」「地域資源を維持する意欲が増大する」の 4 点にまとめた (大東・全 2019)。また行政職員の語りからは、「地域の人々の張り合いになる」「地域の組織・伝統文化の継承につながる」「地域資源を維持する意欲が増大する」「地域の人の援助行動がみられる」「自分たちで地域のことを考えるきっかけになる」とまとめ、当大学間連携共同教育事業による授業を通じた地域社会への影響の特徴を「地域の人の援助行動がみられる」にあるのではないかと推測した (大東・徳井 2020)。

一方、地域の受け入れ団体のメンバーの語りからは、先行研究や行政職員の語りに見られた影響、特にメリットや利点が語られなかった。この理由として、学生の受け入れが大学からの直接の要請ではなく行政を介しての要請であり、その後の大学との連絡も行政を介しての連絡となっていたために、地域の受け入れ団体から見れば、第一に何のために学生を受け入れるのかの目的意識が地域の受け入れ団体に希薄になりがちであったこと、第二に大学が学生を地域に送り込む目的あるいは大学生が地域で活動する目的が分からず、地域の受け入れ団体側にも学生を受け入れることによるとまどいが見られるということである (大東 2021)。

さらに、こうした状況で学生の受け入れを行うことにより、地域の受け入れ団体の人々は主観的には地域への影響はないと語る。しかし、大学側が学生の活動を的確に伝えること、さらには地域・大学・行政の連携によって、地域側が期待する学生の活動が可能となり、そのことで地域がメリット・利点を得ることが考えられると思われる (大東 2021)。これは大学の授業におけるコーディネーターとしての担当教員の重要性を示していると考えられる。以下では、結果として担当教員が地域受け入れ団体に授業以外で関わりを持った事例について見ていきたい。

## 3. A 市 B 地域での活動の経緯

B 地域は A 市の中央に位置する農山集落である。A 市は人口約 5 万 2 千人、大都市からは

120～150 km の距離にある。最近まで市内には高速道路がなく鉄道も少子高齢化や過疎化の影響から運営が厳しい状況にある。豊かな自然に恵まれ農山漁村が広がっている一方、伝統工芸や機械金属業などの産業も盛んである。B 地域は A 市の北西部旧町の中央に位置する海沿いの集落である。

B 地域での C 大学の活動は 2019 年度より始まり初年度の活動であった。B 地域が学生を受け入れたきっかけは、B 地域まちづくり委員会の構想を描いていた行政と地区連合会との協働であったようである。当時の連合区会長で学生受け入れ団体である B 地域まちづくり委員会のメンバーによれば、A 市では学生が活動する地域が他にいくつかあり、その活動を見たことで B 地域においても学生を受け入れたいと考えたようである。特に、地域の活性化やまちおこしに関して地域外、特に都会に居住する若い人の消費や定住が話題になるが、地域の人と都会に居住する若い人のギャップを地域の人に理解してもらうために、学生受け入れの構想を持ったという。

一方、大学側はグローバルプロジェクトマネジャ資格に関わる実習初年度であったため、担当教員である筆者はこの実習のねらいについて説明を行い理解を求めた。すなわちグローバルプロジェクトマネジャは「専門教育と現実の社会のニーズ、特に経済界の人材ニーズとの橋渡しという課題解決のために、アカデミックな専門教育にキャリア教育を本格的に組み込み、地域経済の将来を骨太に構想できる人材を育成する」（文部科学省・日本学術振興会 2015:33）「グローバル人材」に与えられる資格であり、4つの内容要素「公共マインド」「ビジネスマインド」「グローバルマインド」「大学独自の要素」と2つの教育方法要素「双方向性」「企業連携」を満たすことが必要である（大東貢生・長光太志・全炳昊・大窪善人・牧野芳子・徳井公樹 2021）。つまり B 地域の産業と連携し地域の産業の課題に取り組むことが不可欠であることを伝えた。

こうした双方の了解に基づいて B 地域での C 大学の取り組みが始まったが、このことが意図せずに、行政を介さずに直接に地域と大学の双方の目的を伝えるきっかけになったと言えそうであり、その後の学生の学びにも大きな影響を与えることとなる。

2019 年度の実習は、概ね月一回の大学内でのミーティングと、B 地域での活動であった。B 地域での活動は 5 月と 8 月に地域の産業である農業、畜産業、織物業等の見学、その間の大学でのミーティングによる地域課題の整理、11 月の地域の文化祭での織物業イベントに伴い、9 月・10 月に地域のプロモーションビデオの撮影、12 月以降には地域に織物業による仕事の創出を目指し、織物を利用した小物を地域の人々が制作し SNS を通じて販売する提案を 2 月のまちづくり委員会のセミナーで地域の人々の前でを行い、ワークショップによって学生と地域の人々が実際に織物による小物の制作を行った。こうした展開は大学側の授業の目的を地域に伝えたことで、地域側も大学の目的に沿って学生に期待を持った結果と考えられる。特に学生受け入れ団体のメンバーからは適宜、コスト計算と収益点等の経営的な観点からアドバイスがあり、学生も製造価格、販売価格、見込まれる収益、収益を出すための販売ルート of の提案等でより具体的な提案を行うべく議論を行っており、出された提案はグローバルプロジェクトマネジャ資格に十分適うもの

であったと思われる。

こうした学生の活動と並行して B 地域はまちづくり委員会を設置している。B 地域を含む A 市では地域ごとにまちづくり計画の策定を推進しており、B 地域を含んだ形でまちづくり計画策定のために地域住民に対するアンケートを行ったが B 地域のまちづくり計画は中座したままであった。この時のまちづくり計画の主体は連合区長会であったが、連合区長会では1年任期の区長によって構成されているため、利害調整ができないまま区長の交代となっておりまちづくり計画が中座したままであったようである。そこで当時の連合区会長は、B 地域の将来を担う若手中心に任意のまちづくり委員会を結成し、長期的な観点からの B 地域のまちづくりを検討することを考えたようである。

学生の初回の活動である5月の学生との懇親会の場の前に連合区長会にてまちづくり委員会の設置を議論し、懇親会の場でまちづくり委員会のメンバーとなる地域の若手が集い、学生を交流が行われたようである。

その後まちづくり委員会が正式に発足し、まちづくり委員会が B 地域の学生受け入れ団体となっていくのであるが、まちづくり委員会の当初の目的であるまちづくり計画を検討するために、担当教員である筆者にまちづくり委員会のオブザーバーとなってほしい旨依頼があった。授業関連として依頼を受けた筆者は、現地でのまちづくり委員会に参加し、まちづくり委員会の要請に応じて、まちづくり委員会が企画した3回のセミナーに対する内容の検討、特に第2回セミナーでのまちづくりに関する話題提供及び地域住民が地域について考えるワークショップの開催、第3回セミナーでの学生の織物による小物の制作提案と地域住民と学生が実際に小物を作成し、小物作成の感想を話し合うワークショップを行った。

このように B 地域のまちづくり委員会に担当教員がアドバイザーとして参加することにより、地域のまちづくり委員会メンバーはまちづくり委員会内で授業について話し合いをすることにより、学生の活動の目的が分かり、学生に何を伝えればいいのか学生に地域のどこを見てほしいのか等について共通理解がなされ、授業の趣旨に沿った学生へのアドバイス等を行うことができた。大学側にとっても担当教員はまちづくり委員会への参加を通じて、地域の実情や地域の要望が把握でき、そうした観点から学生への的確な指導を行うことができた。さらにはまちづくり委員会の活動と学生の活動を連動させることで、まちづくり委員会のイベントでの学生の発表が可能となり、地域課題に対して学生が地域と共に解決策を提案するという形が形成されたようである。

したがって B 地域での学生受け入れの活動は、地域と大学・担当教員による受け入れ側の目的と授業の目的について意見交換をすることにより、双方の了解に基づいて B 地域での C 大学の取り組みが始まったこと、B 地域のまちづくり委員会に担当教員がアドバイザーとして参加することにより、地域のまちづくり委員会メンバーはまちづくり委員会内において授業に関して話し合うことにより、授業の趣旨に沿った学生へのアドバイス等を行うことができた。大学側に

とって地域の実情や地域の要望が把握でき、そうした観点から学生への的確な指導を行うことができた。さらにはまちづくり委員会の活動と学生の活動を連動させることで、まちづくり委員会のイベントでの学生の発表が可能となり、地域課題に対して学生が地域と共に解決策を提案するという形ができたと考えられる。

#### 4. B 地域の受け入れ団体の語りから

ではB地域のまちづくり委員会のメンバーはこうした一連の活動に対してどのように考えているのであろうか。筆者は授業期間終了後の2020年2月に受け入れ団体であるまちづくり委員会のメンバーに対して半構造化面接法によりインタビューを実施した。斜字は語りであり、また語り部分の丸かっこ内は筆者が言葉を補ったもの、語り部分の下線は筆者が引いたものである。

学生の受け入れについて地域側の当初の思いはどのようなものであったのであろうか。まちづくり委員会のメンバーは以下のように語る。

「他のところも、市内でいっぱい色んな大学とやってるなかで、やっぱり大学生が感じること、都会の子たちが、当然よくいう、僕が感じたのは外貨を得ないといけないとよくいうんですね。で、若い子たちを定住させないといけないとかいうんですね。いうけど実際に来てみいやって話、今の話。ほら、ギャップ感があるだろうって。それが大切で。地域が言ってることと、都会の子たち、大学生が求めていることは違う。こんな溝は埋まらへんやん。埋めるためにはどうしたらええだろうくらいの気持ちで、僕は大学生を呼びたかった。何をしたいとかこれをして欲しいとかいうことばかりじゃなくて。」

「去年くらいから動き出してる中で、なんとか若い人をこういう地域の考える場に参画していく流れを作りたいなという思いがあって。なかなかその、区長さんが声を掛けるとか、地域の中でそれを実現するのってなかなか難しいと感じていて。ひとつ大学生という若い外の人が入ってくことで、可能性というか、地域の若い人を地域作りに引っ張ってくる動機になるんじゃないかな、力を貸して頂けるんじゃないかなという思いはありました。」

「高校生とかも結局目指すところは大学なんですよ。そこら辺の交流が出来てれば、私も大学生生活が始まるんだと。自分の目指す大学像が、現役の子たちと暮らすことによって、よく見えてくるというか。交流をもっと深める、高校の先生や中学の先生が言ってることとちがって、こんなことをやってるんだみたいなの。まさしく見えてくるのがいいのかなと。」

以上のように、地域の受け入れ団体の思いは「大学生を受け入れることによって地域が考えていることとのギャップを知る」「地域の若い人がまちづくりに参画するきっかけになる」「子どもたちとの交流から将来を検討するきっかけになる」であったようである。

C 地域では学生が地域に入ってきたことによって何かが変わったのであろうか。地域の受け入れ団体のメンバーは以下のように語る。

(学生がC 地域に来ているということは)

「何かの祭りイベントみたいな時に、司会進行をしてもらうとかで関わってやってもらったら、あれが大学生か、というのは分かってもらえるかな。なかなかそこまでのセッションがなかったじゃないですか。文化祭やイベントの時にポンポンと来るくらいで。住民の人がたくさん集まる  
ところにはなかなか一緒に関わることがなかったので。多分知らない方もいらっしゃるし。聞いたことはあるけれどどんな子かは分からへんというのがあったと。」

C 地域での学生の受け入れは1年目ということもあり、地域の方々との関係があまりない状況であるという。受け入れ団体であるC 地域のまちづくり委員会との関係についても、文化祭のイベントでの企画運営を通じ以下のように語る。

「もっと密に連絡出来たらよかったんですけど、文化祭のイベントの担当者の頭の中の描いているものがすごい大きすぎて。それと大学生のセッションが多分上手くかみ合わなかった部分があったと思うんです。それに大学生も一緒にしようよというのがあったんだけど、やっぱり距離もある。なかなか会って密に打ち合わせも出来ないし。そしたらこっちが描いているものと、大学生の描いてるもののギャップが段々出てきて。それが多分上手くいかなかったんじゃないかな。もうちょっとお互いに、距離が遠いので1週間に1回会うとかはなかなか無理なので。何ヶ月に1回ではやっぱりなかなか進まないんじゃないかなと思って。やっぱり大きな何かを企画しようと思ったらもうちょっと密に。一緒にするんだったら入ってこないと、地域のことも分からない、大学生のことも分からない。お互いがなんかよそよそしくなって。大学生はどうしたらいいんだろうっていうし、やろうといった人の思いと、こっちがやろうと思う気持ちが段々とズレがきて、やっぱりバンってきて。けんかじゃないけど言い合いみたいになってしまう。」

以上のようにイベントについての連絡が対面状況においては頻繁にできず、そのことによって感情的なすれ違いがおこったようである<sup>(1)</sup>。こうしたすれ違いがあった中で学生を受け入れたことの影響を次のように語る。

「僕はそんなに（大学生が来ることの影響を）期待してなくて。期待していないということはないけど。何を大学生は示したのかなと。都会の大学生が田舎に来て何を感じて。最後のセッション（まちづくり委員会主催の第3回セミナーでの学生の発表）が良かったので。まああんな感じだろうと。ない物ねだりをしてどうやこうやと、田舎で私たちが例えば生活できる環境に、例えば

置かれたときに何が出来るかなぐらいが。そんなんきっとまだ分からんと思うし。やっぱりそこで根付きたい人も中には自分はそれでいいのかなと思ったので。やっぱり都会の人がこっちに求める空間を。きっとね、それは無理だと思うので、僕は。」

「都会の暮らしをそのまま持ってきたって。そりゃ、そら汲み取りトイレ行って下が見えたら怖いやん。よくあるパターンなんですよ。だけどそれは田舎としてはちゃんとしていかならんのだけど、そういうことで都会の環境を。都会には1キロ圏内に何でもあるので困ることないんですよ、という話なんです。だけど田舎に来たら1キロ圏内にあらへんわけ。移動手段も何もなくて。だからそれをどう解決するか、の課題ですよという話なんです。それを都会のものを持ってきてやれといったって、それはハイリスクハイリターンだろうと思ってますので。じゃそこには何が必要で何が足りないのかとかかというところが学べたら。自分たちも新しい気付きを感じるんじゃないかな。」

と語るように、短期的には何も変わらないであろうと推測されているが、大学生が来ることで、長い目で見れば地域が自分たちのことを考えるきっかけになっているという。

地域の地場産業の活性化のために地域で仕事とすることのできる製品をセミナーで提案したことに対しては、以下のように語る。

「企業も含めて自分らもそうなんですけど。大根1本、漬物ひとつだって、まあ食べたら、めっちゃばあちゃん美味いねって。美味いだろって。ほんならこれおばあちゃんなんで売らんのって。という話やん。売ったら売れるんちゃうんって。ほんなら売ってみようやって。パッキングこうしてネーミングもこうして売ってみようやという発想だと思う。お年寄りなんてね、そんなん絶対そこまでいかへん。「あげるわ、食べなっ」で終わるからね。今の話そういう発想、例えば大学生とか。それは何だという話なんだね。実はやっぱり金を儲けることで地域に金がおいたりとか、仕事出来るかもわからん。そこだと思ふんだよね。結局そこをクリアしないことには今までと一緒。これをやらないことには金を生み出せないし。人も集まってこないし。ほんで仕事がない仕事がないって、よく言うあるあるやん。行政だって、工場建てれば仕事あるって。そらそうかもしれんけど、今のB地域の出来ること。パッキングひとつだって大学生から見ると、「おっちゃんこんなダサイやん、買わへんやん」って。そんな提言でもいいんですよって話。やっぱり大学生がダメだししてもいいと思う、田舎に対して。」

「大学生も思ってることとかはあると思うので、それは自分たちの中だけで解消するんじゃなくて、私らはこう思ってるということは。はっきり地域としてこうした方がいいよということは、言ってもいいと思うんですよ。」

以上のように、地域産業の発展のため、さらには地域全体に対しても大学生の視点からもっと意

見を言ってほしいと語る。

ただそのためには地域側の状況の改善も必要であるという。

「どっちか言ったらこっちもお客さんにしとるかもしれんね。地域がね。大学生をね。手伝って  
くれることがありがたくて、それだけでなっちゃってる。気を付けないといけないね。」

「地域で出来る、地域でみんなが楽しみながら出来ることをやっていかないと。それで大学生も  
そこにずっと入ってこれるような空気作りはしてあげないと、よそよそしくて。何回か来て、最  
後にこんにちはって感じで言うけど。それまでってぼつんぼつんと来るから、誰の人？って感じ  
で見られるし。すごいそれがよそよそしい、距離感がすごいあったから。それはこっちももうち  
よっと気を付けて作ってあげないといけないと思う。大学生もずっと入ってこれるようにしてあ  
げんと、地域の方が。」

というように、地域住民が楽しみながらできることを行い、そこに大学生をお客さんではなく受け入れることができればという。そのためには地域側のコーディネートの在り方も問われるという。

「僕はもう、すり合わせだと思ってるので。ほんまにそのすり合わせを誰がコーディネートする  
かというのは、まちづくり委員会しか出来んと思ってるので。」

「連合区とまちづくり委員会が、どっちがどうかじゃなくていい。一戦を交えてよくタッグを  
組み、共有しながらやっていけることを。自分がおらんようになって次がおるという話にしていかんと。それは継承されていかないと。自分もそう思ってるので。ようやってるねって言われるけど、次に渡してまた動いてるね、という組織になってくれば全然いいと思うので。」

こうした協働の形の中に、地域と大学生との関係を考える。

「若い風はやっぱり新鮮なので。大人たちが思わない発想というか。子供でもそうじゃないです  
か。発想を飛ばしてくれるので、それはすごい刺激的になるので良いことだと思うんですよ。何  
もなかったら、大学生とかいなかったら分からなかったことも見えなかったことも入ってくるの  
で。やっぱりそれは良い風を吹かせてくれたら。良い風を吹かしてくれたらもっと良くなると思  
うので。」

「年賀状でつながったり LINE でつながったり。元気にしとるかって。それが大切で。よかった  
ら来いよみたいな話で。そんなつながりをやとって。ほんで孫がおったら、変なおちゃんが  
来たみたいな、変なお兄ちゃん来たみたいな。それも成長で。やっぱり交流するという。遊んでくれるしね、ちゃんと子供と遊んでくれる、孫守もしてくれる、ええで。外で遊んで来いって。」



「やっぱり交流人口が増えることによって。だから来年海に絶対来ますって（受講生の）男の子らは言ってるし。「電話しますよ」って言ってますし。それでいいんですよ、それで。もうそれはそれで拠点になってくれたらいいと思う。だからそれが逆に将来つながるかも分からへんし。結婚して子供が出来てまた来てくれるかもしれへんし。そのくらいの長い目で見てますけどね。」

地域の大人たちが考えだせない発想が地域の刺激になることが語られるとともに、授業終了後の長期間の交流ができるような状況、交流人口の増加のひとつとしてそれが地域の将来につながるようになればと考えていると語っている。

まとめると、地域の受け入れ団体の思いは大学生の受け入れによって「地域が考えていることとのギャップを知る」「地域の若い人がまちづくりに参画するきっかけになる」「子どもたちとの交流から将来を検討するきっかけになる」であったようである。ただ、受け入れ1年目ということもあり、地域の方々との関係があまりない状況であるという。またイベントについての連絡が対面状況においては頻繁にできず、そのことによって感情的なすれ違いがおこったようである。受け入れ団体のメンバーは大学生が来ることで短期的には何も変わらないが長い目で見れば地域が自分たちのことを考えるきっかけになっているという。地域産業の発展のため、さらには地域全体に対しても大学生の視点からもっと意見を言ってほしいと語る。地域の受け入れ態勢についても地域住民が楽しみながらできることを行い、そこに大学生をお客さんではなく受け入れることができるといふ。そのためには地域側のコーディネート の在り方も問われるという。大学生に対する期待としては、地域の大人たちが考えない発想が地域の刺激になることが語られるとともに、授業終了後の長期間の交流ができるような状況、交流人口の増加のひとつとしてそれが地域の将来につながるようになればと考えていると語っている。

## 5. 考察と課題

この小論の目的は、大学でのアクティブ・ラーニング型の授業による地域での学生と教員の活動が、地域社会に与えた影響について、A市B地域におけるC大学の取り組みから概観することにある。B地域では2019年度にC大学のグローバルプロジェクトマネージャ資格に関わる実習の受け入れを始めたが、当初に地域と大学・担当教員による受け入れ側の目的と授業の目的について意見交換をすることにより、双方の理解に基づいてB地域でのC大学の取り組みが始まったこと、B地域のまちづくり委員会に担当教員がアドバイザーとして参加することにより、地域のまちづくり委員会メンバーはまちづくり委員会内で授業について話し合いをすることにより、授業の趣旨に沿った学生へのアドバイス等を行うことができた。大学側にとっても地域の実情や地域の要望が把握でき、そうした観点から学生への的確な指導を行うことができた。さらにはまちづくり委員会の活動と学生の活動を連動させることで、まちづくり委員会のイベントでの

学生の発表が可能となり、地域課題に対して学生が地域と共に解決策を提案するという形ができたと考えられる。

授業開始一年後のインタビューによれば、地域の受け入れ団体の思いは大学生の受け入れによって「地域が考えていることとのギャップを知る」「地域の若い人がまちづくりに参画するきっかけになる」「子どもたちとの交流から将来を検討するきっかけになる」であったようである。ただ、受け入れ一年目ということもあり、地域の方々との関係があまりない状況であるという。またイベントについての連絡が対面状況においては頻繁にできず、そのことによって感情的なすれ違いがおこったようである。

受け入れ団体のメンバーは大学生が来ることで短期的には何も変わらないが長い目で見れば地域が自分たちのことを考えるきっかけになっているという。そして地域産業の発展のため、さらには地域全体に対しても大学生の視点からもっと意見を言ってほしいと語る。地域の受け入れ態勢についても地域住民が楽しみながらできることを行い、そこに大学生をお客さんではなく受け入れることができるといふ。そのためには地域側のコーディネートのある方も問われるという。大学生に対する期待としては、地域の大人たちが考えない発想が地域の刺激になることが語られるとともに、授業終了後の長期間の交流ができるような状況、交流人口の増加のひとつとしてそれが地域の将来につながるようになればと考えていると語っている。

以上、A市B地域におけるC大学の授業による地域への影響について、担当教員である筆者の観察・経験とインタビューからまとめた。この事例は地域側と大学の双方の目的を共有することと、地域側の組織に担当教員を何らかの形で巻き込むことによって、地域と大学とのギャップを埋め双方にとって効果的な影響があらわれるのではないかとすることを示唆している。しかしながら、ここでの事例は担当教員である筆者の主観的な解釈に過ぎない側面もあり、担当教員を地域側の組織に巻き込む他の事例において、こうした影響が認められるのかについては今後の課題としたい。

## 註

- 1) 2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、当該授業もリモート授業となったが、オンラインでまちづくり委員会とのミーティングをたびたび開催することにより、距離が離れていることによるデメリットは部分的には解消されていると言える。ただし現地での活動は依然として困難な状況にあり、こうしたリアルな活動がリモートによってどこまで代替されるのかについては今後検討する必要がある。

## 文献

- 蜂屋大八, 2014, 「都市部と農村部との異文化交流から創出される学び: 山形県最上郡金山町「域学連携」事業から」『茗溪社会教育研究』(5), 71-86, 2014.
- 早川公, 2017 a, 「地域に期待される「大学の役割」とは何か: 「地域志向教育」のあり様をめぐって(課題先進地における地方創生への挑戦)」『地域活性学会研究大会論文集』(9), 306-309.
- , 2017 b, 「地域志向教育とは何か—地域学, フィールドワーク, 拡張現実」『宮崎大学 教育・学生支援センター紀要』(1), 17-25.

- 久保友美, 2017, 「大学間連携による地域公共人材育成：先端的京都モデル「地域公共政策士」の現状と課題」『龍谷政策学論集』6(1・2), 51-61.
- 水野晶夫, 2013, 「「地域が学生を育て、学生が地域を元気にする」地域連携活動の試み：名古屋学院大学の事例から（特集 地域連携による教育の取り組み）」『大学教育と情報』2013 年度 (2), 12-15.
- 文部科学省中央教育審議会, 2005, 「我が国の高等教育の将来像」  
([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1335581.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1335581.htm), 2018. 9. 20.)
- , 2012, 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」  
([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm), 2018. 9. 20.)
- 文部科学省・日本学術振興会, 2015, 『平成 27 年度大学間連携共同教育推進事業』.
- 中村保ノ佳, 2017, 「洲本市と龍谷大学の域学連携型アプローチによる地域振興の考察：再生可能エネルギーを柱にした事業展開について」『龍谷大学大学院政策学研究』(6), 93-116.
- 長田進, 2015, 「地域貢献について大学が果たす役割についての一考察」『慶応義塾大学日吉紀要 社会科学』(26), 17-28.
- 大窪善人・牧野芳子, 2019, 「「弱い他者」を媒介とした討議の可能性」『佛教大学総合研究所紀要』(26), 109-113.
- 大東貢生, 2018, 「大学改革推進補助金事業の成果と課題」『佛教大学社会連携センター年報』(4) 52-54.
- , 2021, 「授業での学生の活動が地域社会に与える影響について－受け入れ団体の語りから－」『佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集』(8), 83-96.
- 大東貢生・全炳昊, 2019, 「授業を通じた学生の活動による「地域のメリット」とは？－大学におけるアクティブ・ラーニングの影響に関する研究に向けて－」『佛教大学総合研究所紀要』(26), 93-100.
- 大東貢生・長光太志・全炳昊・大窪善人・牧野芳子・徳井公樹, 2021, 「大学と地域・企業の連携による教育とは？－大学間連携共同教育推進事業プログラムの概要－」『佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集』(8), 1-13.
- 大東貢生・徳井公樹, 2020, 「授業での学生の活動が地域社会に与える影響について－行政職員に対する語りから－」『佛教大学総合研究所紀要』(27), 38-49.
- Putnam, R. D, 1993, *Making democracy work: Civic tradition in modern Italy*, Princeton University Press = 河田潤一訳, 2001, 『哲学する民主主義－伝統と改革の市民的構造－』NTT 出版.
- , 1995, *Bowling Alone: the Collapse and Revival of America*, New York: Simon & Schuster Paperbacks = 芝内康文訳, 2006, 『孤独なボウリング－米国コミュニティの崩壊と再生－』柏書房.
- 白石克孝・櫻井あかね・中村保ノ佳, 2018, 「龍谷大学政策学部による域学連携の取り組み（上）：兵庫県洲本市を事例に」『龍谷政策学論集』(7), 137-150.
- , 2019, 「龍谷大学政策学部による域学連携の取り組み（下）：兵庫県洲本市を事例に」『龍谷政策学論集』(8), 29-46.
- 谷村要, 2017, 「地域とかかわる PBL への試み～京丹後市域学連携事業での活動を事例として～」『大手前大学 CELL 教育論集』7, 31-37.
- 徳井公樹・大東貢生, 2019, 「「大学間連携共同教育推進事業」にける資格プログラムについて」『佛大社会学』(43), 51-57.
- 山本早苗, 2015, 「域学連携による地域づくりの現状と課題：「ふじとこ伊豆プロジェクト」の取り組み」『常葉大学社会環境学部研究紀要』(2), 31-47.
- 遊佐順和, 2015, 「高等教育機関による地域力の創出に関する研究：北海道離島地域における人材育成を事例として」『北海道大学大学院教育学研究紀要』(123), 99-117.

## 謝辞

インタビューに応じていただいた B 地域まちづくり委員会のみなさまにはこの場をお借りして改めて感

謝申し上げたい。

#### 付記

この小論は、2017～2019年度佛教大学総合研究所共同研究プロジェクト「大学におけるアクティブ・ラーニングの影響に関する研究」による研究成果の一部である。

(おおつか たかお 共同研究研究代表／佛教大学社会学部准教授)